

2012年度

新潟大学国際センター 年報

Annual Report
of Niigata University
International Exchange Support Center
2012



宮田 春夫

研究テーマ：環境と開発に関する南北関係

多様な主体が多様な役割を果たす複合的相互依存の国際社会において、環境と開発に関わる南北関係はどうあるべきか、全地球的レベルから地域共同体レベルまで、また、多国間協力、二国間協力を包括的に捉えて、政策のあり方を探っていきたいと考えています。

また、教育においては、理論と現実の両方を見ることにより、理論を現実 に即して理解すること、また、対応を理論に基づきつつ現実 に即したものとすることが出来る学生を育てたいと考えています。

所属学会：国際開発学会、環境科学会、International Studies Association、日本平和学会

1. 授業等

2011 年度と同じく、「教養教育に関する科目」及び課題別副専攻「平和学」の授業のほか、農学部及び現代社会文化研究科の授業も担当しました。2012 年度には、加えて、UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific - アジア太平洋大学交流機構) の超短期プログラムとして2週間で2科目を開講する「Summer Course at Niigata University: Lessons from Contemporary Japan」を企画・開始し、その前半の「Environmental Problems and Development of Policies in Japan」を開講しました。

学部レベルで英語で開講している教養教育に関する科目は、短期交換留学プログラム科目としても重複指定されています。そのほかにも、課題別副専攻「平和学」に指定されている科目があります。

課題別副専攻「平和学」として単独開講している科目の一部は、開発途上国の問題に強い関心を持つ学部生・大学院生のために始めた勉強会を正式な授業としたものです。

本学における担当授業一覧

開講期	授業科目名	備考
春	Applied Research of International Relations: North-South Relations for the Environment and Development	教養教育に関する科目。短期交換留学生用科目としても指定。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。大学院用の内容を、学部生向けの評価方法にして開講。
	Environmental Policy Study: History of Environmental Problems and Development of Policies in Japan	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目としても指定。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開を見ながら、どのような環境問題の変化、社会の変化、国際関係により環境政策が変わって来たのかを論じる。
	国際開発協力演習（環境と開発）	課題別副専攻「平和学」科目。 開発援助と環境の事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供。

	国際開発協力論：「開発」概念Ⅰ	課題別副専攻「平和学」科目。 OECD 開発局の職員たちが書いた「開発」についての考え方の変遷を紹介した本（英語）を使い、どのようにして「開発」についての認識が深まっていったか、どのような背景の下に各々の開発理論が論じられたか、それぞれの開発理論がどのように開発援助等に影響したか等を論じる。
秋	国際開発協力論：「開発」概念Ⅱ	課題別副専攻「平和学」科目。 「改革派」とされる考え方の流れを汲む Amartya Sen が <i>Development as Freedom</i>（英語原著）で整理した「開発」の幅広い概念を学ぶ。
	North-South Relations for the Environment and Development	現代社会文化研究科。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。
	人類共同体のための国際環境政策学	教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」科目としても指定。 どうして環境に関する国際協力を行うかに重点を置いて、背景の国際秩序の課題、「持続可能な開発」の本来の意味、「地球環境問題」と捉える無意識の課題認識、「持続可能な開発」の状況を示すエコロジカルフットプリント、国際協力の歴史等の基礎について論じた上で、多国間協力、条約、ODA 等の個別課題について論考。
	平和を考える in 新潟	教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」科目としても指定。 複数の教員や外部講師の講義による授業の 1 コマを担当し、「開発途上「国民国家」の外と中の秩序」と題して、「民族」や「宗教」によるものと思い込まれている紛争の問題について論考。
	平和学総合演習	課題別副専攻「平和学」科目。他の副専攻「平和学」委員と共同で担当。 副専攻修了認定予定学生 2 名に対する論文指導等を実施。
	平和学修了ペーパー	
	自然環境関連法規	
集中講義	開発途上国の環境と開発：事例研究	教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」指定科目。 2011 年度と同じく、カンボジアに加え、ラオス、ベトナムを訪問し、NGO による農村の環境保全と現金収入策を組み合わせた活動等を見せて頂くことを予定したが、UMAP 夏季プログラムのために準備時間が取れなかったこと及び希望学生が少なかったことから、今年度の実施は見送ることとなった。

	Environmental Problems and Development of Policies in Japan	春学期に開講の Environmental Policy Study: History of Environmental Problems and Development of Policies in Japan を基に集中講義として開講。4 日間の講義の後、5 日目には、現場での説明、「語り部」の手配及び必要経費の負担等、新潟県立水俣病資料館の全面的な御協力により、水俣病の原因となった有機水銀が放流されていた現場を見学した上、水俣病の「語り部」の講義を受けることで、日本の環境政策をより具体的に学ぶ。
--	---	---

以上のほかに、正式な開講教員として登録されていませんが、課題別副専攻「平和学」科目である「平和学入門」（春学期）のうち4コマ（「南北問題・人間開発」及び「環境問題」）は、私の専門に関わる内容であるため、担当教員と共同で講義しました。

2. 課題別副専攻「平和学」

2008年12月から課題別副専攻「平和学」委員会に参加し、2009年4月から同委員会の代表を務めています（副専攻自体は大学の教育課程に位置づけられた明確な制度ですが、各副専攻の委員はボランティアです。）。この立場から、課題別副専攻「平和学」の修了ペーパー（2名）の指導、審査、4科目の非常勤講師との連絡・調整、副専攻の運営の調整、管理、ウェブサイトの構築と維持管理、全学教育機構や他の副専攻との調整等を行っています。また、非常勤講師として、毛利聡子・明星大学教授を発掘し、多様なアクターが多様な役割を果たしている複合的相互依存の下で重要なテーマで、グローバルイゼーションの中で更に重要になっている「NGOから見る国際関係ーグローバル市民社会への視座」を夏季集中講義として実現しました。毛利教授の多忙のため、今後は隔年開講の予定です。

3. 研究活動

(1) 学会活動

国際開発学会（6月、12月）、International Studies Association（2012年3－4月）等に参加して座長を務める等、議論するとともに、国際開発学会の会計委員会の業務の一部に関わりました。2011年11月からは国際開発学会理事も務めています。また、2012年11月、常任理事会から、2015年秋の全国大会の新潟開催を要望されたため、新潟県立大学の2会員及び高崎経済大学の1会員とともに、その実行可能性の検討を開始しました。

(2) フィールド・スタディーに関する研究会

「百聞プラス一見」の力を学生につけさせるべく、授業で知識を得ることに加えて、効果的かつ安全に開発途上国の現場を見る機会を重視しているので、引き続き、「大学教育における「海外体験学習」研究会」への参加等を重視していますが、2012年度の研究会（国際基督教大学）には参加できませんでした。安全対策等、実施に関わる課題の研究や情報の維持にも努めています。

4. 開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するための特別講義等

開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するため、実際に協力に従事している方等から講演等して頂いて具体的な知識を得る会を、一部については課題別副専攻「平和学」の開講科目「国際開発協力演習（環境と開発）」と

関連付けつつも、その科目の履修生以外にも開放し、また、特に意義があるものについては学外にも開放して企画・開催していますが、2012年度は、UMAP 夏季プログラムの立ち上げの負担が非常に大きかったこと等のため、実現しませんでした。

しかし、引き続き、ODA 関連機関・企業、国際機関等、開発途上国関連の職に就きたいとする学生からの相談がしばしば寄せられ、進学先、就職のための諸条件等について助言しています。

5. 多大学間交換留学：UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific — アジア太平洋大学交流機構) による交換留学

アジア・太平洋多大学間交流 (University Mobility in Asia and the Pacific: UMAP) 担当者としてそのオンライン学生交流システム (UMAP Student Connection Online: USCO) の仕組みを研究した結果、本学でも 2010 年度受け入れ分から受け入れることになりました。受入人数は少ないものの、通常の二大学間協定ではカバーされていない大学との交流が行われていることに大きな意義が認められます。しかしながら、本学からの派遣はいまだに実現していないことが課題です。

2012 年から 3 年間、UMAP 超短期奨学金が供与されることになった機会に、本学でも夏季プログラムとして、私の開講する「Environmental Problems and Development of Policies in Japan」と阿波村教授、張准教授他によるオムニバスの「Japanese Experiences from Various Perspectives」の 2 科目（それぞれ 2 単位）で構成し、それぞれの科目の履修価値をを高めるエクスカッションを付帯させる形で「Summer Course at Niigata University: Lessons from Contemporary Japan」を実施しました。11 名の学生が参加し、加えて、「Environmental Problems and Development of Policies in Japan」の水俣病関係の見学等には、正規生 1 名（医学部保健学科看護学専攻）が参加しました。教養科目（G コード科目）の開設決定の半年後にプログラム開設が決まったため、正規生には情報が十分に届かず、また、卒業に必要な単位にも算入されない「R コード科目」であったことにより、正規生との交流の機会が限られました。しかし、2013 年度には、私の科目は教養科目（G コード科目）として開講して、正規生との交流の機会を拡大する予定です。

この UMAP 超短期プログラムでは、2 名の派遣も実現しました。いずれも、フィリピンのバタングラス市にあるの Lyceum of the Philippines University at Batangas の Center for Language Learning で英語を学ぶプログラムに参加したものでした。日本と同じ時期に授業の無い国・地域が限られる中、この大学のプログラムは、教員が対応できる限りにおいて随時実施し、かつ、学ぶ期間も希望に応じるものであったため、実現しました。

6. その他

次のところにウェブサイトを設け、授業についての詳細情報の提供等を行っています。

<http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/>